

## プライト・ソネットの影

楠瀬健昭

次に掲げる詩 "The Caged Skylark" は、Gerard Manley Hopkins(1844-89)による Petrarchan sonnet である。1877 年夏、Wales の St Beuno's での作であるとされる。1875 年に "The Wreck of the Deutschland" で詩作を再開したホプキンスは、1877 年には、神の壮麗をたたえる "God's Grandeur" をはじめ、キリストにささげる最高傑作 "The Windhover" など、10 編の、いわゆるプライト・ソネット群をものにするが、このソネットは、その中のひとつである。

### The Caged Skylark

As a dare-gale skylark scanted in a dull cage,  
Man's mounting spirit in his bone-house, mean house, dwells—  
That bird beyond the remembering his free fells;  
This in drudgery, day-labouring-out life's age.

Though aloft on turf or perch or poor low stage,  
Both sing sometimes the sweetest, sweetest spells,  
Yet both droop deadly sometimes in their cells  
Or wring their barriers in bursts of fear or rage.

Not that the sweet-fowl, song-fowl, needs no rest—  
Why, hear him, hear him babble and drop down to his nest,  
But his own nest, wild nest, no prison.

Man's spirit will be flesh-bound when found at best,  
But uncumbered: meadow-down is not distressed  
For a rainbow footing it nor he for his bones risen.

### かごのひばり

大風をものともしないひばりが退屈なかごに構わずに置かれているように

人間の舞い上がるころは骨の家、みすぼらしい家に住まいする  
かの鳥はとうてい野で自由に遊んだとは思われない  
こちらは骨折り仕事で日々疲れ果てる労働が一生続くのだ

宙高く、芝草、止まり木にとまり、あるいは、あわれに落ちぶれた舞台に立ち  
鳥も人も時にはこのうえもなく甘美な呪文を唱えることもあるが  
それでも時には独房の中でぐったりとうなだれることもある  
また、恐怖に襲われたとき、激怒のほとばしるときには、格子をぐっと握りしめることもあ  
る

甘美な鳥、鳴鳥が疲れを知らないということではない  
まあ、聞きなさい、鳥が自分の巣に舞い降りながらさえずるのを聞きなさい  
でも、それは自分自身の巣、自然の巣であって、牢獄ではない

人間のころは、とどのつまり肉に縛られている  
しかし、煩わされることはないのだ、虹は草地を踏むが、  
草地は困ることはない。ころも復活した体に悩まされることはないのだ

この詩はブライト・ソネット群にあつて、"The Lantern out of Doors"とともに、いささか憂いを含んだものになっている。もちろん、「神の壮麗」にも、神のわざをたたえながら、人間のしわざを嘆く部分があり、"In the Valley of the Elwy"の中でも、ホプキンはウェールズの世界を賛美しながら、「ただここに住んでいる人間だけがこれと感応しないのだ」と詠う。"The Sea and the Skylark"にも、「この浅薄な脆弱な町」、「この濁ったあさましい世」など、「活気と魅力を失っている」という表現は見られるが、それらは主題を引き立たせるものにすぎない。この時、詩人はそういう人間存在とは一定の距離を取っていて、みずからはその中に含まれていないかのようなのである。

ところが、「戸外の提灯」では、詩人はそこに登場する人間との距離が近く、実体験に基づく表現に思えるところがある。姿や心が美しい人も「貴い光線を降らせてくれるが、...死か疎隔かがまもなく彼らを消耗してしまうのだ」という一節があるがためか、最終的に「キリストは心にかけたまう」のは確実ではあるが、何かしら深い悲しみが感じられる。そして、靈魂と肉体の問題を取り上げる詩、「かごのひばり」でも、人間は最終的には救われるわけではあるが、それでも、この詩を読みながら、現世に生きる人間の苦しみや悩みを感じてしまうという点において、この詩には「チョウゲンボウ」の華麗なる飛翔にあこがれ、"Pied Beauty"において神の創造したまえる「斑なる美」をたたえ、"Hurrahing in Harvest"で実りの秋をむかえ「収穫の歓喜」に酔う詩とは、同じ時期に書かれていても、違った趣がある。

しかし、おそらく、これは信仰をもたない者の感覚であろう。ホプキンは、かごの中の鳥のように、肉体によって自由が束縛されている、ころの状態を嘆いているわけではない。

このようなこころの状態は、十四行詩の前半部である、八行連（二つの四行連）で提起された問いである。大きな発想の転換がなければ、容易に解決しない問いである。それだけに、俗人には解決不能の苦境のように思われる。死によって、もしかしたら、魂は肉体という束縛から解放されるのかもしれない。しかし、肉体をもたないものは、感覚をもたないかもしれない。また、その意志を表現するには、あらたな肉体を必要とするのかもしれない。あるいは、魂は肉体と一体であり、肉体が減れば、魂も消滅するのかもしれない。肉体なしには、わたしたちは考えることはできないのかもしれない。実際、科学的に考えれば、それが事実かもしれない。

ソネット後半部の六行連（二つの三行連）で与えられた答えは、わたしたちの及びもつかない考えである。信仰と言うべきかもしれない。つまり、聖書によれば、人間は、キリストがそうであるように、死後、復活するわけで、そのときには、もちろん肉体をもつわけではあるが、生前の肉体とは違うのである。すなわち、「コリント人への第一の手紙」15章49節には、「わたしたちは、土に属している形をとっているのと同様に、また天に属している形をとるであろう」とある。

その復活体は、この詩の最終行では、bones risen と表現されている。あきらかに the risen Christ、すなわち復活したキリスト、昇天したキリストを想起させる言葉づかいである。つまり、福音書に見えるイエスの復活と昇天の出来事だけでなく、キリスト教信者もまた、「終わりのラッパの響きと共に」（コリント 15：51、）イエスに似た体を与えられることを思い出させる言葉である。Bones は body（身体）であり、skeleton（骨格）でもある。Bones risen は二行目の、同じく身体を表す bone-house（骨の家）という単語と対をなす言葉でもある。Bone-house は、現代英語の bone house（棺桶、納骨堂）という死を連想させる意味も響かせながら、古英語の bānhūs(bone house=body)という kenning を応用し、さらに mean house（陋屋）と巧みに言い換え、bone-house が「みすぼらしい」ものであると語りつつ、house の同音反復で、リズムよく軽やかに畳かける。ケニングとは、「一つの名詞を複合語または語群で隠喩的に表現する技巧：中世ゲルマン諸語（特に古期英語や古期北欧語）の詩にみられる特徴で 18 世紀の詩でも用いられたもの」である。ケニング（代称法）の例としては、hwælweg (=whale-way=sea)、woruldcandel (=world-candle=sun)、oar-steed=ship がある。

また、この bones risen の risen と、最終行で alliteration（頭韻）を踏む rainbow は、bones risen の性質を巧みに説明する。すなわち、虹は天と地をつなぐもの、実体はありながら、大地に足を置いても質量を感じさせない。それは、まるで復活したイエスを思わせる。実際に、肉体をもちながら、イエスは霊のように自在に現れたり消えたりするだけでなく、天上と地上を往来することができるからである。しかも、rainbow は rain（雨）と bow（弓）からなり、そのように分かつたらば、bones risen との間で、rain、risen の r だけではなく、bow、bones の bo(w)においても、同音反復しながら、音の交錯配列を楽しんでいる。また、rain-bow は bone-house と b o(w)を共有しながら、「雨の弓」、「骨の家」という単語そのものの組成が似通っていることも興味深い。すなわち、bone-house は、bones

risen からすると rainbow という一見、単なる比喩と思える単語を介して、bones risen へと昇華している。

こうして、最後の三行連では、「人間のころは最善の状態であっても、肉に束縛される」と言い、一瞬、八行連の問題提起にいったん答えを保留するかのようみせて (flesh-bound と found at best において、f、b の繰り返しと -ound の同音反復によって、余裕を持った語り口で、軽やかな調子を生み出している)、次行の but uncumbered 「しかし、煩わされることはないのだ」で、きっぱりと宣言し、答えを求める読者の期待感を高めるかのようである。そして、rainbow のメタファーを経て、bones risen に至り、はじめて読者の疑念は氷解する。Man's spirit と his bones risen との関係は、meadow-down と rainbow の関係と同じであるとするメタファーは、巧妙である。

また、十四行詩を四つに分割したとき、いわば漢詩の起承転結の転にあたる、ひとつ目の三行連では、かごのひばりではなく、自然のひばりが自分の巣、野にある巣に戻ることに、本来の自由に大空を飛翔する姿、休息のために自分の巣（もちろん、それは牢獄ではない）に戻ることを詠うことで、捕えられ、かごという cell (独房) に入れられているのは、人間の仕業によることを思い出させる。ここで、詩人が sweet-fowl、song-fowl、hear him、hear him、drop down、own nest、wild nest などの同音反復と頭韻を多用するさまは、ひばりの鳴き声のように聞こえる。

ここまで、ソネットの後半部を中心に読んできたが、内容的にも詩のリズムからも、わたしが最初に述べた憂いなどは、見当たらない。したがって、もしも、わたしの印象に間違いがなければ、そのわけは前半部にある。

第一四行連は、落ち着いた滑り出しで、本来自由であってほしい人間の精神が、肉体という枠組みから逃れられないという宿命を、囚われの身のひばりに例えて、荘厳に語る。勇ましく dare-gale skylark で始まる第一行は、その skylark が scanted と頭韻すると、すっかりその勢いをそがれ dare は dull となりはて、かごの中に入っている。二行目においても、man's mounting spirit と m を重ねて威勢がいいが、実は bone-house、mean house と畳みかけられ、高揚すべき mounting は mean となり、最後は、dwells と一行目の dull と同じ d で終わる。この音の反復は、次の二行でも、bird beyond、free fells、drudgery、day、labouring、life と執拗である。頭韻だけでなく、各行で、gale、cage、mounting、house、remembering、fells、day、laboring、age と、母音押韻も几帳面に施されている。脚韻の abba だけでなく、非常に計算された仕組みになっている。しかし、四行目の「こちらは骨折り仕事で日々疲れ果てる労働が一生続くのだ」には、もちろん一般論で語ってはいるが、何気なく詩人の実感がこもっているように聞こえる。

第一四行連を承けて、第二四行連では、さらにひばりと人の、それぞれの状況を説明する。「宙高く、芝草、止まり木にとまる」のは、ひばりであり、ひばりを入れるかごは高い所につるされ、そのかごの中には芝草がしかれている。止まり木もあることだろう。また、「あわれに落ちぶれた舞台に立つ」のは人間であり、ふと、詩人が説教壇に立ち、説教し、礼拝をつかさどる姿を、わたしは想像する。ひばりはかごの中にあっても美しい声でさえずり、

同様に肉に閉ざされていても、人は神の教えを朗々と説く。しかし、ひばりも人も、それぞれかごの中、独居室で droop deadly となることもある。あるいは、「恐怖に襲われたとき、激怒のほとばしるときには」、ひばりは、かごから脱出しようと、かごのすきまに首を突っ込み、人は肉体をどうすることもできなくて、窓格子をつかむこともある。

ここでは、詩人はひばりに感情移入し、何かしら自分自身の境遇をも嘆いているようにも聞こえてしまう。もちろん、ホプキンは人間一般のことを詠っているわけであるから、そう聞こえるのは、わたしたちの錯覚かもしれない。ただ、人間は信仰心があれば、やがては復活し、その肉体に煩わされることはないとはいえ、現世では、やはり、windhover のように飛翔することはできない。この詩のタイトルは "The Caged Skylark" である。タイトルが主題をかならず表現するわけではないが、"Bones Risen" と単刀直入は避けても、"Man's Mounting Spirit" とか "Rainbow" になっていれば、ブライト・ソネット群にふさわしいのかもしれない。いずれにしても、このタイトルから、わたしたちは、Henry Mayhew の *London Labour and London Poor* (1851) にあるように、何千何万という数のひばりが捕らえられ、売り物にされていた時代を思う。

"The Caged Skylark" のテキストは『ホプキンズ詩集』第4版による。「かごのひばり」は拙訳である。その他のホプキンの詩の引用は、安田章一郎『ホプキンズ研究』による。『聖書』からの引用は、日本聖書協会（1976年）による。ケニングの説明は、『英和大辞典』（研究社）からの引用である。